

## 市民シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」

### 『人類は戦争をやめることができるか？』

“人新世における人間とは何か” 生物学・哲学・社会学からのアプローチ  
趣旨説明

森中 定治（日本生物地理学会、放送大学埼玉 SC、綾瀬川を愛する会）

日本生物地理学会は、鳥類学者の蜂須賀正氏博士と東京大学理学部教授で生物地理学の第一人者であった渡瀬庄三郎教授によって、山階芳麿博士、黒田長禮博士ら当時の著名な鳥類学者の助力を得て昭和3年（1928年）に創設された。同研究領域の学会としてはフランスに次いで世界で2番目である。蜂須賀正氏博士は、平成15年（2003年）の生誕百年記念シンポジウムにおいて“型破りの人”との評がなされた。自己の信念と哲学に基づいて戦争の世紀を駆け抜けた人であった。渡瀬庄三郎教授は、区系生物地理学における旧北区と東洋区の境界を示す“渡瀬線”によって著名であり、昨今話題になるジャワマンダースを移入した。現在は特定外来生物として駆除の対象ですが、当時困っていた野鼠やハブの被害を防ぐために生物学の知識を社会に役立てようと積極的に行動した強いパワーの持ち主であった。

日本生物地理学会創設者の人となりを考え、学問を専門家の枠に留めることなく、人類社会に直接活かそうと考えた。生物学に関する研究発表や正規のシンポジウムとは別に、生物学に限定しない無料一般公開の“市民シンポジウム『次世代にどのような社会を贈るのか？』”を開催するのはこのような理由からである。

生物学の原点は博物学と分類学にある。16世紀に英国が世界を股にかけて版図を伸ばしました。見たこともない動物や植物を採集して標本にし、それを分類した。たくさんの標本が集まってそれが分類されると、世界の動物や植物がある特定の場所を境にしてガラッと変わることがわかるようになった。生物地理学は、その境界線を見つけ出し生物を地理的に区分をする学問として出発した。生物地理学は、昨今の分子生物学の発展と相俟って現代における生物地理区だけでなく、生物の誕生以来の歴史を見出し、そして人類を含む生命の未来を見通す時空を超えた学問、言葉を変えれば過去から未来に渡る生命史を探求する学問“時空生物学”として発展途上にある。

この市民シンポジウム『次世代にどのような社会を贈るのか？』は平成15年（2003年）に行われた蜂須賀正氏生誕百年記念シンポジウムに続いて平成16年（2004年）から始まり、今年の令和7年（2026年）まで2回の大会中止を挟み20回の開催となった。

近年のテーマを以下の列記する。

平成29年（2017年）

対談「益川敏英著『科学者は戦争で何をしたか』をめぐって」

平成30年（2018年）

「森中報告『種問題とパラダイムシフト』をめぐって」

平成31年、令和元年（2019年）

「リベラル化する世界の分断」

令和2年（2020年）

新型コロナのために大会中止

令和3年（2021年）

「『種問題（生物学）から見える人類の道』利他が人類を救う一相模原障害者殺傷事件を発端に、鬼滅の刃を切り口に」

令和4年（2022年）

講演 1 「利他性—自然科学と社会科学の架け橋として」

講演 2 「経済学における利己と利他」

令和 5 年 (2023 年)

「人類は戦争をやめることができるのか？」

令和 6 年 (2024 年)

『人類の生成と消滅』

令和 7 年 (2025 年)

論考「人類が戦争をやめるための生物学」をめぐって

今年度

令和 8 年 (2026 年)

“人新世における人間とは何か” 生物学・哲学・社会学からのアプローチ

上記のタイトルを見てお分かりいただけるように近年では“人類”、“種問題”、“利己性・利他性”そして“戦争”がこのシンポジウムの大きな潮流となっている。

昨年の講演要旨の最後に「現代は人新世と呼ばれますが、人新世はこの“人間の形”を理解するための時代であると、私は考えます」と記したが、その“人間の形”を生物学を土台として、哲学、社会科学を踏まえて示す。

それは通常の論理的な思考からすれば奇妙なものであるが、私の説明をお聞きいただければわかってもらえるものと思う。

そして「人新世」とは、この“人間の形”を知った人類が現れ社会に形をなす時代であり、人類の大きな変換点になる時代であると私は考える。